

【ポスター発表】

特別養護老人ホームにおけるソーシャルワーク実習プログラム開発に向けての課題

- ケアワーク体験の有用性と実習生のコンピテンスの観点から -

武庫川女子大学 竹内美保 (04624)

〔キーワード〕: ソーシャルワーク実習、ケアワーク体験、コンピテンス

1. 研究目的

特別養護老人ホームの利用者へのソーシャルワーク（生活課題の解決）とは、「生活支援、介護、家族関係の調整等」への対応が中心である。入所施設における実習プログラムの開発に向けて、1つにはレジデンシャル（施設）・ソーシャルワークの機能を明確に理解すること、2つには、特別養護老人ホームにおけるソーシャルワーク実習では、どのようなコンピテンスの獲得を目指して実習が行われるべきなのかを検討する必要性があると考えられる。

このような問題意識から、本研究では、特別養護老人ホームにおけるソーシャルワーク実習プログラムの開発に向けて、特にケアワーク体験の有用性と実習生のコンピテンスの観点から今後検討されるべき課題について明らかにすることを目的とする。

2. 研究の視点および方法

(1) 研究の視点

実習プログラムに関する新しい研究成果の1つに、社会福祉士養成校協会（以下、「社養協」とする）による『介護保険分野における社会福祉士養成実習のモデル構築に関する研究（2009年3月）』がある。その実習プログラムでは、従来のケアワーク中心の実習からソーシャルワーカーの専門性を意識した内容となっており、ソーシャルワークを意識した実習プログラムへと大幅な転換が図られた。社養協は、ソーシャルワーク実習におけるケアワーク体験の問題点を6つ挙げ、その影響を否定的に捉えている¹。

しかし、漠然と行われてきた「ケアワーク体験」であるが、何らかの有用性は認識されている。たとえば、「身辺介護抜きにトータルな利用者理解はできない」、「人とのかかわりが出来なければソーシャルワークはできない」、「ケース研究をするのに問題点を見つけやすいため」という意見である²。つまり、ソーシャルワーク実習における「ケアワーク体験」が、ソーシャルワーカーのコンピテンスの獲得に繋がることが明確になるならば、その有用性は再評価されるのではないかと考える。そのうえで「ケアワーク体験」を実習プログラムに取り入れられるのであれば、これほど有意義なことはないであろう。このように、特別養護老人ホームでのソーシャルワーク実習において、実習指導者（生活相談員）が「レジデンシャル・ソーシャルワークの機能」を実習生に伝え、「ケアワーク体験」を通して「ソーシャルワーカー（実習生）のコンピテンス」を効果的に習得させるためにどのような実習プログラムが適切なのか、その方法論の構築と検証が求められている。

(2) 方法

1) 「レジデンシャル・ソーシャルワークの機能」については、文献研究及び特別養護老人ホーム生活指導員（実習指導者講習会修了者）2名に対し半構造化面接のインタビュー調査を行った。

¹ ソーシャルワーク実習でケアワークを行うことの影響として、未習者に突然ケアワークをさせることはサービスの低下による利用者の権利侵害をもたらす。介護・保育上の事故を惹起するおそれが高まる。限られた時間でソーシャルワーク実習の時間が圧縮される。ケアワーク体験実施の理由として挙げられる「利用者理解」の到達点や評価の枠組みが未確立ななかで、雲をつかむような目標設定がなされている。ケアワークの専門性否定につながる。他職種の理解が目的であるとすれば、なぜケアワーク体験のみなのか。が挙げられている。（社）日本社会福祉士養成校協会編集『相談援助実習指導・現場実習教員テキスト』中央法規出版 2009年 pp.149 - 150

² 米本秀仁「社会福祉専門職における現場実習の現状とこれからのあり方に関する調査研究報告書」平成13年度「長寿・子育て・障害者基金」福祉等基礎調査 p.91

実施時期：2010年2月～2011年5月（計のべ13回）

2)「ケアワークの有用性」については、文献研究及び上記の対象者に対してインタビュー調査を行った。実施時期は、1)と同時に実施。

3)「実習生のコンピテンス」については、「2009年度北星学園大学社会福祉援助技術現場実習指導・社会福祉援助技術現場実習自己コンピテンス・アセスメント」約170項目から60項目を選択し、項目の文章表現を一部変更して再構成した。以下に調査の実施状況を示す。

〔アンケート項目の検討〕2010年2月、アンケート項目の検討（予備調査）を目的としてA大学社会福祉学部の実習生（3年生）213名にアンケート調査（60項目）を実施。因子分析を行い、アンケート項目と因子構造の確認を行った。

〔実習前コンピテンス〕2010年7月、当年度のソーシャルワーク実習予定者であるA大学の3年生153名、B大学3年生49名、計202名に対して、実習前における実習生のコンピテンスに関するアンケート調査（45項目）を実施。欠損値を除いた有効回答数は192（有効回答率95.0%）。

〔実習後コンピテンス〕2010年11月、ソーシャルワーク実習終了者のA大学3年生156名及びB大学の3年生34名、計190名に対して実習後のコンピテンスのアンケート（45項目）を実施。欠損値を除いた有効回答数は178（有効回答率93.6%）。

〔実習前と実習後のコンピテンスの変化〕実習前（192名）と実習後（178名）のアンケート回答者のうち、両方に回答した者のみを選定したところ149名のサンプルが得られた。実習前・実習後のコンピテンスの変化を見るため、対応のあるt検定を実施した。

3. 倫理的配慮

武庫川女子大学大学院臨床教育学研究科の倫理審査規定に基づいて、アンケート調査およびインタビューを実施した。調査票には、回答は自由であること、個人名は特定されないこと、アンケート結果は成績評価に反映されないこと等を明記し、説明を行った。また、インタビュー調査では、事前に音声データ録音及び逐語録の作成について対象者より許可を得て実施した。

4. 研究結果

本研究の結果として、現時点では以下のようにまとめられる。

1つに、レジデンシャル・ソーシャルワークの機能については、社養協が示している「レジデンシャル・ソーシャルワークの9機能」がある。しかしながら、この9機能の理解について現場の実習指導者は、「レジデンシャル・ソーシャルワークという用語をほとんど聞いたことがなく、9機能は表現が抽象的であり、自分なりにその内容を咀嚼し、理解を深めてからでない」と実習プログラムへの展開や実習生の指導は難しい」という声が聞かれた。実習指導者の十分な理解に向けて、養成校側からのフォローが望まれる。

2つに、ソーシャルワーク実習におけるケアワーク体験の有用性については、実証的な検証はなされていないが、文献研究及び実習指導者へのインタビューの結果から、「ケアワーク体験」の有用性は認められると考える。具体的には発表時に提示する予定である。

3つに、実習生のコンピテンスについては、2010年11月実施のアンケート結果を因子分析し、再度因子構造を確認したところ「基礎能力」に関する尺度は4因子、「知識」は4因子、「技術」は3因子が抽出された。因子ごとに平均値をとり、t検定を行った（N=149）。結果、実習前と実習後の比較において、「基礎能力」では「積極性」「自己理解」「コミュニケーション」、「知識」では「制度組織」「施設分析」「援助方法」、「技術」では「ソーシャルワークのプロセス」「記録技法」「面接技法」の因子において0.1%あるいは1%水準の有意差が認められた。

今後の研究の方向として、「実習生のコンピテンス」の柱の1つ、「ソーシャルワークの価値・倫理」の重要性に注目する。つまり、「ケアワーク体験」を通して「福祉の心」を理解し、それを体現できる能力をもっている人を養成できないかというものである。これを実現するために、実習生のコンピテンスを示すアンケート項目に新たな尺度を加え、それらを習得するための新たな実習プログラムを検討し、展開していくことを考えていきたい。